きのたん

こぶし

令和元年５月３１日

第３号

支笏湖小学校

校長　小川　亮男

令和元年度　学校重点教育目標

『実践力（できる）へとつながる学校教育活動の推進』

学習習慣、学習規律を身につけるとは……

校長　小川　亮男

新緑も色を増し、校長室から見える風不死岳の雪も消え、子どもたちが毎日えさをあげてくれているおかげで、多くの野鳥が学校でも見られるようになりました。新しく時代が変わり、今では「令和」もかなり前から使っていたような気さえしています。

さて、前回は他国との意識の違いを書きましたが、千歳中校区の小中連携会議が行われたこともあり、授業の様子から話を進めます。

今年度の学校重点教育目標が、『実践力（できる）へとつながる学校教育活動の推進』であり、「できる」ことへの努力が、教師と子どもたちの間で積み上げられています。「家庭学習ができるようになった」「忘れ物をしないようになった」「授業中の姿勢がよくなった」「時間の中で給食が食べられるようになった」「丁寧な言葉遣いができるようになった」「友達に対して優しく接することができるようになった」……。こうした子どもたち一人一人の成長を数え上げていく一年にしていきたいと思います。

私が中学校で数学を教えていた時を思い出すと、学校の評価が、相対評価から絶対評価へと変わる時期でした。

今は同じ評価の生徒がいたら同じ評定（成績のほうが分かりやすいですか）になりますが、昔は違いました。評定である５４３２１の人数が決まっていましたので、１点、あるいは0.5点の違いを求めて、１番の子から最下位の子まで順位をつけていました。保護者の皆様の時はどうでしたか。今は絶対評価に伴う評定ですので、「５」が何人にいてもよく努力の積み上げによる加点方式がとられるようになりました。（昔はどちらかというと減点方式）

- 毎日出される宿題を提出するたびに加点（出さないといつまでも加点されません）
- 毎時間行うミニテスト（５分テスト）の点数を加点
- 発表内容や取り組みの内容の加点（挙手の回数ではありません）
- ノート提出の加点とその内容の加点
- 定期テストの点数を加点

などでした。こうして積み上げた点数を総計して成績をつけていました（定期テスト６割、その他４割くらいの比率でした）。日常点である毎日の宿題やミニテストの積み重ねがとても大きく、学校や教科によりやり方に違いはありますが、大枠は今も同じはずです。つまりテストの点数だけではなく日常の積み上げとなり、そこで、「小学校のうちに学習の習慣化を」と、その頃の私たちは小学校の先生方に強くお願いしていたことを覚えています。

- 家庭学習の習慣（机に向かって集中して取り組むことができる習慣）
- 必要な物などの準備を自分でできる習慣
- 宿題を毎日やる習慣　などなど……

その頃の小学校の先生方も苦労していたはずなのに、私自身、若いころは、校区内の小中指導交流の時などで「いや～今年の１年生は、忘れ物が多くて……」などと、失礼なことに小学校の先生に向かってぼやいていたことを覚えています。その後、中学校のことは中学校でという風潮になり、生徒たちへの学習習慣の定着指導を行うようになりました。これが今で言う中１ギャップの始まりだったのかもしれません。というのも、やはり、学習習慣というものは小学校時代に身につけておかないと中学になってからではなかなか身につかないものだからです。６年かけて身につけてしまった習慣を１～２ヶ月で何とかしようとするとそこに大きな壁が立ちふさがります。この壁を乗り越えるのがなかなか難しい。日々の授業も小学校と比べかなり早く進み、部活動もある中、家庭学習を頑張ろうとし始めたとしても追いつかなくなってしまいます。そこで、かなり前から小中連携や９年間を見通した教育が叫ばれるようになりました。話が長くなりました（私見）。ようやくここで、始めに書いた千歳中校区小中連携会議となります。この後は、６月７日（金）に行われるＰＴＣＡ全体会②の時に。